

令和3年9月1日に思う

やはり大気は不安定です。このお盆も前線が停滞して九州や各地で大雨による甚大な被害が発生しました。

本格的な台風シーズンを前に、気が重いです。この夏、57年ぶりに自国開催となったオリンピックとパラリンピック。コロナ禍でもあり、多くの国民がテレビの前に釘付けとなったことでしょう。そうした中、相変わらず根強い人気があるのがNHK朝の連続テレビ小説であります。

現在放送中の「おかえりモネ」は、宮城県の海と山での経験の中で気象に出会い、気象予報士となったモネを通じて山に降った雨が川となって海に注がれ、太陽の光で雲になり、また雨となって注ぐという「水の循環」を描こうとされているようです。

気仙沼の牡蠣養殖業者が登場します。ここで思い出したのは平成元年当時の「森は海の恋人」という言葉と「漁師が山に木を植えた」という畠山重篤（しげあつ）さんの活動です。

そのころの川上村では、大滝ダム建設事業の真只中にあり、役場の中では「ダム後の村づくり」に動き出し、湖底サミットやそまびと選手権大会を開催し、ホテル杉の湯を建設するなど観光と吉野川紀の川の最上流であることを生かした村づくりを進めようとしている時でした。

30年以上前から、川を通した水の循環を守ろうと、川上村は山から、気仙沼は海から取組みの声を上げていった歴史をあらためて感じています。あの本村を襲った紀伊半島大水害からちょうど10年。循環社会を意識しながら、空が気になります。

引きつづきコロナウイルスに注意しながら、大雨に細心の心得が必要です。